

高等学校ホームルーム経営についての考察

—現職教員へのアンケートをもとに—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
156042 加納頌子

高等学校ホームルーム経営についての考察

ー現職教員へのアンケートをもとにー

加納 頌子

生徒指導力高度化コース

要約：高等学校におけるホームルーム経営について、意義の理解や取組みの不十分さがこれまでに指摘されている。そこで、実際に現職高等学校教員が感じているホームルーム経営の課題を明らかにするためにアンケートとインタビューを行った。その結果、(1) 高等学校教員のホームルーム経営に対する理解は学習指導要領に則したものである、(2) 高等学校においてホームルーム経営よりも教科指導が重視される傾向がある、(3) ホームルーム経営に自信をもって取り組むことが難しい傾向がある、(4) 生徒との関わりがホームルーム経営について自信を持つきっかけとなる、(5) ホームルーム経営のスキルを身につける過程では経験が重視される、(6) 生徒や高等学校のあり方が多様化してきたためにクラスがまとまりにくくなっている実態がある、という6つの点が明らかになった。結果の考察から、ホームルーム経営のスキルを向上させるためにはホームルーム経営についても事例検討を行うことが有効ではないかと考えた。

キーワード：ホームルーム経営 高等学校 特別活動 教師の学習 集団づくり 学習指導要領

はじめに

これまでの実習の経験から、私はホームルーム経営に関心をもつようになった。専門実習Ⅱで私は国語科で話し合いを重視する授業を行った。その結果、クラスの人間関係が不十分な段階では、話し合いを深めることが難しいということに気づかされた。この経験から、次期学習指導要領で重視されている「対話的な学び」を行うためには、ホームルーム経営の充実が高等学校でも必要ではないかと考えるようになった。しかし、先行研究が指摘しているように、ホームルーム活動については教員ごとに取組に差があるのが現状である。¹

2016年8月26日に発表された「特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（以下「取りまとめ」と略記）が指摘しているように、これまでホームルーム活動は専門の免許がないことや、高等学校では教科の専門性がより重視されることから、ホームルーム経営の観点での教員養成が不十分な傾向にあった。²

高等学校では、ホームルーム経営よりも、教科指導を重視すべきだという考え方もある。しかし、「取りまとめ」は「学級活動・ホームルーム活動を通して、学級（ホームルーム）経営の充実が図られ、学びに向かう学習集団の形成に寄与することが、各教科等における「対話的な学び」

を支えることになる」として、ホームルーム活動と学習との関連性にも触れている。³高等学校での学力向上を目指すのならば、やはり、ホームルーム経営の観点も欠かせないのではないだろうか。

そこで、本研究では、実際に現職高等学校教員が感じているホームルーム経営の課題を明らかにするためにアンケートとインタビューによる調査を行った。アンケートとインタビューの結果の考察から、ホームルーム経営についても事例検討を行うことで、ホームルーム経営のスキルを向上させることができるのではないかと考えた。

第1章 「ホームルーム活動」に関する先行研究の分析

1-1. 「ホームルーム活動」とは

ホームルーム活動は特別活動の中に位置づけられている教育活動である。「学習指導要領」ではホームルームを「学校における生徒の生活の単位組織として、ホームルームとしての固有の生徒の活動が行われるとともに、学校における生徒の様々な活動の基盤としての役割を果たす場」と定義している。⁴その目的は、「ホームルーム活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてホームルームや学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」⁵ことである。

「取りまとめ」では、これまでの特別活動全体について、「構成の異なる集団を通して行われるそれぞれの活動が、児童生徒が学校生活を送る上での基盤となる力や社会で生きて働く力を育む活動として機能してきた。(中略)各活動及び学校行事が望ましい集団活動を通して行われるという特質があり、各活動及び学校行事を通して、協働性や多様なものを認め合う土壌を育むなど、生徒集団、学習集団として機能するための基盤がつくられている」⁶と総括している。

小・中学校における「学級活動」と高等学校における「ホームルーム活動」は児童生徒の学校生活の基盤となるという点では共通しているが、高等学校の場合、選択授業などの影響でホームルーム単位での活動時間が少なくなるという違いがある。学校によってはホームルーム自体が無いこともある。

1-2. 高等学校における「ホームルーム活動」の現状と課題

「取りまとめ」は今後のホームルーム活動の課題として、話し合い活動に関する学校間、教員間の取組みの差を指摘している。このように、学校間・教員間に話し合い活動の取組み方に差が生じている要因として、中学校・高等学校における話し合い活動の意義が十分理解されていないこと、学級活動・ホームルーム活動の内容項目が多いことを挙げている。⁷

日本特別活動学会(2001)が実施した調査では、学級活動およびホームルーム活動において、学習指導要領に則した指導が十分に行われているかどうかについての意識は「十分」33%、「わか

らない」31%、「不十分」36%という結果になっている。⁸

文部科学省による全国の国公私立学校を対象とした2004年の調査では、学級活動・ホームルーム活動で「諸問題の解決に努めるとともに、現在及び将来の生き方を幅広く考え、積極的に自己に生かしている」という設問に「十分に満足できる状況にある」と答えた学校は小学校56.0%、中学校43.5%、高等学校33.8%である。高等学校の特別活動の中で詳しく「十分に満足できる状況にある」と答えた割合をみると、ホームルーム活動33.8%、生徒会活動48.5%、学校行事58.1%であり、特に高等学校におけるホームルーム活動が不十分であることがわかる。⁹

柴崎直人ら(2010)の研究では、大学生1020人を対象とした調査から高校のホームルーム活動の実施状況を示している。調査の結果、多くの高校では学習指導要領に記載された内容を扱っていることが分かった。しかし、学校によっては、学校行事の準備や自習、教科授業への振り替えといった教科学習の補填という二つの準備活動にホームルーム活動の時間が使われている。特に3年生になるとホームルーム活動で扱うことが学習指導要領に求められている内容から離れていく傾向を指摘している。さらに、柴崎ら(2010)はホームルーム活動の目的と意義、重要性を教師が十分に認識したうえで生徒にも理解させたうえで活動時間を確保して行うことでホームルーム活動を活性化できるのではないかと述べている。他に学校・学年としての特別活動計画と担任によるホームルーム計画を作成すること、その内容を教員全体で把握、展開、修正を加えることも、ホームルーム活動の活性化のために必要な取組として挙げている。¹⁰

第2章 高等学校教員へのアンケート調査の結果と分析

2-1 調査目的と方法

現職教員のホームルーム経営観を調査し、ホームルーム経営の課題を考察する。

2016年8月～12月にかけて高等学校教員8名を対象にアンケート調査を行った。この8名とは別に、1名の教員(I教諭)にはインタビュー調査を行った。調査対象の教員の内訳を表1に示す。

	表1 調査対象の内訳								
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
勤務年数	7	14	15	20	28	28	32	37	37
勤務校	公	公	私	公	公	公	公	私	私

2-2.調査内容と結果

アンケートの質問項目を表2に示す。インタビューの結果は抜粋したものを末尾にまとめた。

質問2～5は「1. 全くあてはまらない」「2. 少しあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. 少しあてはまる」「5. とてもあてはまる」の5段階の選択肢から回答する。質問6は「1. 経験を重ねる」「2. 研修(学内)」「3. 研修(学外)」「4. 本を読む」「5. その他(自由記述)」から選ぶ。質問番号7～11は全て自由記述である。

表2	
	質問内容
Q1-1	勤続年数
Q1-2	勤務校
Q2	高等学校でもホームルーム経営に力を入れるべきだ
Q3	ホームルーム経営のスキルに自信がある
Q4	高等学校ではホームルーム経営よりも、教科指導に力を入れるべきだ
Q5	ホームルーム経営と学力の間に相関はありますか
Q6	ホームルーム経営のスキルはどのようにして身につけるものだと思いますか
Q7	ホームルーム経営について、いつごろから自信が持てるようになりましたか
Q8	ホームルーム経営について、自信が持てるようになったきっかけは何ですか
Q9	高等学校におけるホームルーム経営の目的は何だと思えますか
Q10	高等学校のホームルーム経営と、小中学校のホームルーム経営の違いは何だと思えますか
Q11	実際にやってみてうまくいかなかった、ホームルーム経営の工夫を教えてください

2-3. 調査結果の考察

アンケートとインタビューの結果、以下の6点が指摘できる。

(1)高等学校教員のホームルーム経営に対する理解は学習指導要領に則したものである。

質問2から「高等学校でもホームルーム経営に力を入れるべき」と考えていることがわかる。

(表3) 質問5では「取りまとめ」が指摘しているホームルーム活動と学力との関連を現職高等学校教員も感じていることが分かる。(表4) 質問9の自由記述には「生きる力」や「集団体験」など、「学習指導要領」と共通する表現が見られることから、多くの高等学校教員はホームルーム経営について、「学習指導要領」に則して理解されているといえる。(表5)

表3

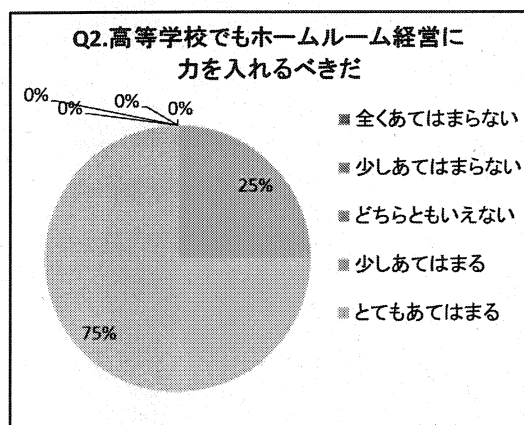


表4

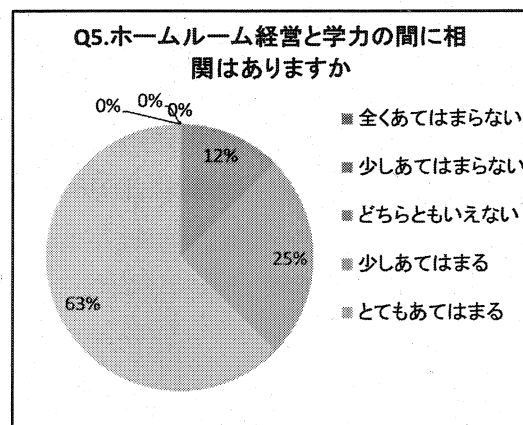


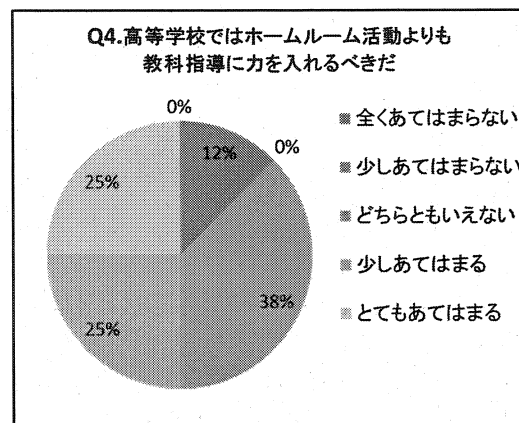
表5

	A	B	C	D	E	F	G	H
Q9	生徒たちの心身の健やかな成長。人間関係(生徒間、生徒と教師)を学び、深めること。		身近な大人として生きる見本を見せること・大人として生きるための力をつけること	社会でのコミュニケーション能力・実践力をつける	生徒の人的成長	集団(社会)体験	1年:できるだけ多くの人と交流する・2年:部活と勉強の両立をはかり・3年自学自習を確立し、人の邪魔をしない。	生徒の生きる力をはぐくむため

(2)高等学校においてホームルーム経営よりも教科指導が重視される傾向がある。

質問 4 の結果から、高等学校ではホームルーム経営よりも教科指導が重視される傾向がわかる。(表 6) 高等学校では進路保障も欠かせないため、教科学習をより重視する結果になったのではないだろうか。また、教科指導力が向上することで生徒の信頼を得ることができ、ホームルーム経営を円滑に行うことができるという考え方も影響していると考えられる。

表 6



(3)ホームルーム経営に自信をもって取り組むことが難しい傾向がある。

質問 3、質問 7 の結果から、高等学校教員が自信を持ってホームルーム経営に取り組むことが難しいことが分かる。(表 7) 質問 3「ホームルーム経営のスキルに自信がある」に対して、「とてもあてはまる」と回答した教員はいない。「少しあてはまる」と回答したのは勤続年数 30 年以上の教員 G、教員 H だけである。勤続年数 28 年の教員 E は質問 7 でホームルーム経営について「今も不安がある」と回答している。この結果から、ホームルーム経営の自信は教員経験の長さによってのみ身につくものではないということがいえる。

(4)生徒との関わりがホームルーム経営について自信を持つきっかけとなる。

質問 7、質問 8 の結果から教員がホームルーム経営について自信を持つきっかけとして生徒との関わりの影響が大きいことが分かる。質問 7、質問 8 ではホームルーム経営について自信を持ったきっかけとして「(生徒を) 持ち上がりで卒業させたこと」というキーワードが 9 人のうち 3 人のコメントに表れている。自分が担当した子どもたちを無事に送り出すことができた経験が多くの教員の自信につながっている。「定時制でほぼ全員を 2 年に進級させた」という D 教諭のコメントも、担当した子どもを無事に次の段階へ進ませることができた、という点で、「持ち上がり」経験に近い。

他に、「先生が担任でよかったと言ってくれたこと」「生徒たちに慕われた」など、生徒との良好な関わりから教師がホームルーム経営に自信を持つ姿が伺える。子どもによる声かけが教師の成長を促すことは今津孝次郎 (2012) も指摘している。¹¹

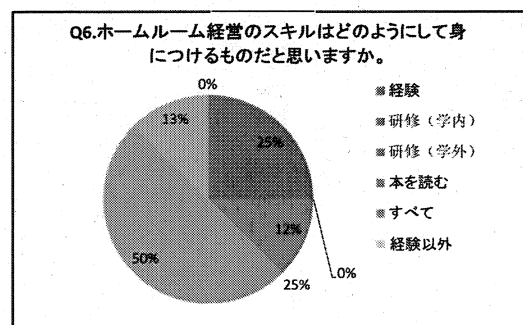
表7

	A	B	C	D	E	F	G	H
Q3	3	3	2	3	3	3	4	4
Q7	教諭として採用されて4年目からの3年間、1年→2年→3年と持ち上がった生徒が卒業していった頃(6年目の終わり頃)	一年から持ち上がった学年を卒業させたところから	自信を持つと足をすくわれます・10年たち、自分に子どもができた頃	新採1年目の終わり	今も不安がある	ホームルーム担任の経験が少ないのでなんともいえない。	3年目をすぎたから	有志の勉強会で授業研究をし、授業力がついてから
Q8	明確なきっかけはない！上記の生徒たちが、先生が担任でよかったと言ってくれたことか。		ホームルーム経営について効果のある方法の勉強をはじめたこと	定時制でほぼ全員を2年に進級させた・学校に不信を持つ生徒達にしたわれた	明確なものはない		1学年を持ちあがりて卒業させたということ	上記に同じ

(5)ホームルーム経営のスキルを身につける過程では経験が重視される。

質問6「ホームルーム経営のスキルをどのようにして身につけるか」に対しては、選択肢の「経験、研修(学内)、研修(学外)、本を読む」の全てを選択する教員が最も多い。(表8)特に「経験」は8人のうち6人が選択しており、重視されやすい要素だといえる。

表8



(6) クラスとしてまとまりにくい実態がある。

高等学校の生徒の実態として、A教諭のアンケート、I教諭のインタビューでの回答に「クラスを無理にまとめる必要はないのではないか」、「リーダー的な生徒がクラスから浮きやすい」という共通した内容があった。(表9、I教諭インタビュー抜粋)

表9

	Q.10	Q.11
A	生徒の自己主張が強くなり、生徒間の関係も固定されつつある。無理にクラスのカラーやまとまりを形成しようとするのではなく、サポートに徹する？	文化祭のクラス活動など、リーダーシップを発揮できる生徒がなかなかいない場合に頑張らせすぎると、リーダー役の子がつかなく、クラスもまとまりにくかったように思う。←それも苦しいけれど楽しい思い出。

第3章 総合考察

今回の調査を踏まえて、2点考察する。1点目はホームルーム経営のスキルを向上させる方策について、2点目は今後の高等学校におけるホームルームの在り方についてである。

3-1. ホームルーム経営のスキルを向上させる方策について

アンケート調査の結果、高等学校教員の多くがホームルーム活動の意義を十分に理解している一方で、教員経験が20年以上であっても自信を持ってホームルーム経営を行うことが難しい現状があることがわかった。

「学習指導要領」の内容は抽象的であり、その具体的な実践については現場の教員に任されている。多くの高等学校教員は、「学習指導要領」におけるホームルーム経営の意義を十分に理解したうえで、具体的にどのように実践すればいいのか、という点で不安があるのではないかと考えた。

河村茂雄（2013）は学級・ホームルーム経営の現状について、以下の2点を指摘している。

①学級集団育成に関してだれもが強く支持するようなパラダイムが乏しく、教師によってどのような学級集団の状態をよしとするのかが違い、②その結果事例検討の際に感情論や相互批判に陥りやすく、建設的な議論が難しいことがあり、ホームルーム経営の事例検討はタブー視されがちであるという。この2点を指摘したうえで、担任教師の指導力不足批判になることを防ぎ、教師どうしのディスカッションを建設的なものにするようなホームルーム経営の事例検討方法としてK-13法を提案している。¹²

河村（2013）が指摘するように、ホームルーム経営について具体的に指針とすべきものが曖昧で、かつ自分の実践を検討する機会が少ないために、多くの教員はホームルーム経営について自信をもつことが難しくなっているのではないだろうか。「取りまとめ」が指摘するように、今後話し合い活動や対話的な学びが一層重視されるならば、経験の浅い教員であっても自信をもってホームルーム経営に取り組めることが必要である。

坂本篤史・秋田喜代美（2008）は授業研究における研究授業後の事後協議会において、他者の発言を聞いて自身の解釈と結びつけながら考えることで教師の学習が生じること、その際に自身の解釈に固執せず、柔軟に他者の視点を取り入れることが重要であることを指摘している。¹³この指摘は授業場面においてのものだが、ホームルーム経営についても同じように、事例検討の場面を設けることで教師の学習が生じらるうと考えられる。

そこで河村（2013）が提案しているK-13法のように、相互批判にならないよう工夫された方法を用いて、ホームルーム経営についても事例検討の場面を設けることで、ホームルーム経営のスキルを向上させることができるのではないだろうか。

3-2. 高等学校におけるホームルームの在り方について

アンケート調査とインタビュー調査の結果、生徒の実態は変化に伴って、ホームルーム経営の在り方も変化すべきではないか、という考え方が見られた。アンケートとインタビューで言及されていた、「リーダー的生徒が浮きやすい」「クラスがまとまらない」という現状の背景には、人と深く関わることを好まない現代の若者の傾向と、高校生の生活環境の多様化が影響していると考えられる。

青少年研究会（2015）が2014年に10代後半～20代の若者を対象に行った調査では「友だちとの関係はあっさりしていて、お互いに深入りしない」という設問に対して「そうだ」「どちらか」というと「そうだ」と答える若者があわせて57.6%、「友だちと意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」という設問に対しては、「どちらかといえばそうではない」「そうではない」と回答する若者が73.9%という結果になっており、友人と深く関わることを好まない傾向があることがわかる。¹⁴この傾向が「リーダー的生徒が浮く」要因として考えられる。

「クラスがまとまらない」背景には、高校生の生活環境の多様化があると考えられる。河村（2010）は理想の学級集団の状態になるためには、所属する子どもたちが生活習慣や生活体験をある程度共有していることが必要であり、幼少期の生活環境が大きく異なる子どもたちで構成された学級では、理想の学級集団の状態にするのが困難であることを指摘している。¹⁵

多くの普通科高等学校では、それまでの経験も卒業後の目標も異なる生徒が集まるため、生活習慣や生活体験の共有が難しく、河村（2013）が指摘しているように、理想の学級集団としてまとまることが困難であると考えられる。

このような生徒の変化や学校の実態にあわせて柔軟に対応するためにも、学内でも事例検討の場面を持てるようにしたい。

おわりに

本研究では現職高等学校教員を対象としたアンケート調査、インタビュー調査をもとに、高等学校教員が実際に感じているホームルーム経営の課題について考察した。その結果、ホームルーム経営についても事例検討の場面を設けることで、ホームルーム経営のスキルを向上させることができるのではないだろうかという新しい仮説を立てた。今後、事例検討によってホームルーム経営のスキルが実際に向上するのか、その結果教員はホームルーム経営の自信を身につけることができるのかどうか、検証していきたい。また、今回ホームルーム経営のスキルを向上させる方策については考えることができたが、ホームルーム経営のスキルの具体的な内容については明らかにすることができなかった。変化する高等学校においてホームルーム経営をおこなう上で、どのようなホームルーム経営のスキルが必要となるのか、という点も今後の課題である。

これまでに数回、学級・ホームルーム経営の事例検討の場に参加させていただく機会があった。

成功も失敗もユーモアを交えながら、しかし厳しい目で検討する先生方の姿を見せていただいた。事例を提出した先生も、検討する先生方もともに得るものがある検討会であった。この経験からも、互いの失敗をさらけだせる関係性の中での事例検討は、ホームルーム経営のスキルの向上につながっていくのではないかと考えている。

最後に、研究にあたって調査にご協力いただきました先生方、論文執筆にあたってご指導を賜りました京都教育大学連合教職実践研究科の先生方に深く感謝申し上げます。

付録 I 教諭 インタビュー抜粋

今はクラスを一つにすることは難しい。クラスを一つにしなければいけないのか？っていう。多様な生徒を育てようとしているのに、ひとつにしないといけないのか。いくつかのグループに分かれていてもいいじゃないか。(I 教諭の勤務校には) どちらかというクラスが煩わしくて来ている、という生徒がいる。そういう煩わしくて来たという子は突飛なことをするとか過激な生活かというとは決してそうではなくて、落ち着いている生徒が、ぎゃぎゃあしているクラスが嫌だと言って来た子、文化祭や体育祭でリーダー的な存在だった生徒がそれで急に浮いちゃって、やりすぎちゃって、それで学校におれなくなって来るとか。色々いるんやけど。そういうのが…文化祭や体育祭きっかけでトラブルが起こるよね。高校はね。それが昔ならクラスに残らない、先に帰るっていう子が浮いたりしたんやけど、今は反対で。「やろう、盛り上がりやないかー」と言ってた子が浮いてしまって、(I 教諭の勤務校に) 来た子もいた。高校でクラスって必要なんやろうか。(…中略…)

40、50 代の先生は、昔のクラスを理想とするんよね。「合唱やりましょう」「球技大会は一緒になって、プレーしているときは残りの人は応援に行きましょう」とか。それをイメージするし、それで育ってきた人たちが今先生になるから、それをやろうとして、でも、今言ってみたいに、ゆるいつながりでいい年齢なのに、きゅっとやってしまうから、クラスがうまくいかなくなってきたのかもしれない。小学校とか中学校はそれでもいいかもしれない。ある程度規制というか、強制された集団に入る。で、高校になるとやっぱりみんな自律していく年代だから、自立を助ける、支援する集団作りに変わっていくべきなんじゃないかな。

¹ 文部科学省 (2016) 「特別活動ワーキンググループにおける審議のとりまとめ」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/066/sonota/1377088.htm)

(2016/12.15 確認)

² 同上

³ 同上

⁴ 文部科学省 (2009) 「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」 海文堂

⁵ 同上

⁶ 文部科学省 (2016) 前掲書

⁷ 文部科学省 (2009) 前掲書

⁸ 日本特別活動学会研究企画委員会 (2002) 『特別活動調査報告書』

⁹文部科学省（2004）「特別活動の状況」

（ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/06101306/003/006.htm ）

2016.12.15 確認

¹⁰柴崎直人・林幸克・長沼豊（2010）「高等学校におけるホームルーム活動の実施状況と課題--大学生を対象とした質問紙調査に基づいて」『日本特別活動学会紀要』（18）, 31-39

¹¹今津孝次郎（2012）『教師が育つ条件』 岩波新書 p25

¹²河村茂雄（2013）『シリーズ 事例に学ぶ Q-U 式学級集団づくりのエッセンス 集団の発達を促す学級経営 高等学校』 図書文化社 pp11-13

¹³坂本篤史・秋田喜代美（2008）『授業の研究 教師の学習』明石書籍

¹⁴青少年研究会（2015）「若者の生活と意識に関するアンケート」

（<http://jysg.jp/research.html>） 2016.12.15 確認

¹⁵河村茂雄（2010）『日本の学級集団と学級経営』図書文化社 pp100-101